

## 骨折の負の連鎖を止めるために



## 骨粗鬆症を理解する



整形外科 医長（日本骨粗鬆症学会認定医） 住吉 範彦

日本は2007年に高齢化率が21%を越え、超高齢社会となりました。急速な高齢化に伴い、骨粗鬆症患者も年々増加し、現在1300万人の骨粗鬆症患者が存在すると推測されています。しかし、骨粗鬆症についての理解は医師においても不十分で、適切な検査や治療を行う医療施設が少ないのが現状です。

WHO(世界保健機関)では、「骨粗鬆症は低骨量と骨組織の微細構造の異常を特徴とし、骨の脆弱性が増大し、骨折の危険性が増大する疾患である」と定義しています。このように、骨粗鬆症は単なる老化現象ではなく、疾患であり、骨折は結果として生じる合併症の一つと考えなければなりません。

骨粗鬆症による骨折は、椎体・大腿骨近位部・下腿骨・橈骨遠位端・上腕骨近位部・肋骨などの部位で生じやすく、骨折が生じると著明なADL(日常生活動作)・QOL(生活の質)の低下と死亡リスクの増

大につながります。また、骨折の発生がその後の新たな骨折発生の危険因子となるため、初発骨折の予防が重要であり、骨粗鬆症による脆弱性骨折を生じた患者さんには、さらなる骨折を予防するために治療を開始する必要があります。

骨粗鬆症診断では、dual-energy X-ray absorptiometry (DXA) を用いて、腰椎と大腿骨近位部の骨密度を測定します。骨密度が若年成人平均値(YAM)の70%以下の場合、骨粗鬆症と診断されます。椎体骨折または大腿骨近位部骨折があれば骨密度に関わらず骨粗鬆症と診断され、その他の脆弱性骨折があり、骨密度がYAMの80%である場合にも骨粗鬆症と診断されます。

骨粗鬆症治療では食事療法、運動療法、薬物療法の3つの方法が柱となります。治療の対象は骨折リスクが高い例となりますが、適切な治療を受けられている患者さんは少なく、大腿骨近位

部骨折例に対する薬物療法の実施率は20%に満たない状態です。

当科でも脆弱性骨折例は年々増加していることが実感されるほど患者数は増加しています。骨粗鬆症認定医として、骨粗鬆症の認知度を向上させ、初発骨折、二次骨折・三次骨折の予防に努めたいと考えています。



骨粗鬆症性椎体骨折



大腿骨近位部(転子部)骨折

## 骨粗鬆症マネージャーとは？



薬剤部 課長（骨粗鬆症マネージャー） 黒星 美奈

超高齢社会の現在、骨粗鬆症の治療を受けている患者さんは約200万人、大腿骨近位部骨折や脊椎椎体骨折後の治療率はわずか20%程度です。

治療継続率に関しては、治療開始1年で45.2%の患者さんが処方通りの服薬ができず、5年以内に52.1%が治療を中断してしまうとの報告もあります。骨粗鬆症性骨折を予防するためには、骨粗鬆症治療への誘導と治療開始後の継続が重要と言えます。

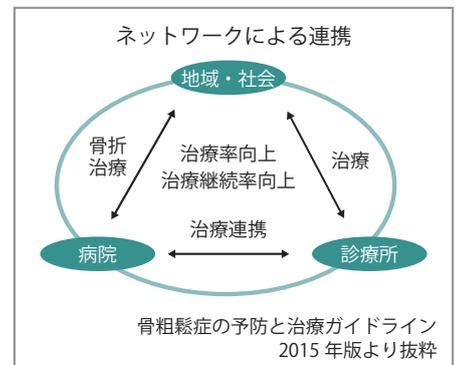
日本骨粗鬆症学会では「骨粗鬆症リエゾンサービス(OLS)委員会」を設立し、医師及び多職種メディカルスタッフが相互に連携しながら、骨粗鬆症の予防と改善及び骨折防止の取り組みを行うことで、初発の骨折を防ぎ、骨折の連鎖を絶つことを目指しています。OLS提供者は「骨粗鬆症マネージャー」と呼ばれ、同学会が認定しています。

骨粗鬆症マネージャーが活動する場

は、社会啓蒙や骨粗鬆症検診を行う「地域・社会部門」、開業医等の「診療所部門」、入院患者を中心に対応する「病院部門」の3つに分けられます。

当院は「病院部門」に該当し、対象は骨折患者・骨折(術)後患者・骨折リスクが高い患者さんや高齢者です。注射製剤による骨粗鬆症治療をする際には、安全で適切に薬物療法が行えるよう、初回導入時に患者さんへ薬効・副作用・自己中断の影響等を説明してから投与を開始しています。また、骨粗鬆症薬を内服中の入院患者さんには、アドヒアランスの確認や服薬を継続する意義、食事や運動の重要性なども指導しています。

これまでもビスホスホネート製剤などの特殊な服用方法の薬は、服用時の注意点(空腹時の服用や服用後30分は横になってはいけない等)や顎骨壊死などの副作用について説明してきましたが、現在「骨のお話」という簡易的なパンフレットを作成中で、今後はこれをもとに骨折リ



スクや健康寿命を伸ばすための取り組みなど、より詳細な情報を提供していく予定です。

さらに、骨折リスクの高いステロイド投与患者さんや糖尿病患者さんに対する骨粗鬆症治療の促進を薬剤師から医師へ働きかけていきたいと考えておりますが、そのためには他の薬剤師にも骨粗鬆症治療の重要性を理解してもらうことが必要です。まずは身近なところから勉強会等で知識のレベルアップを図り、日々の業務の中で、それぞれの薬剤師が一次骨折の予防に取り組むことで、院内の骨粗鬆症治療率・継続率の向上に寄与していきたいと思っております。